

曹操の辟召一事例の基礎的分析—

西 川 利 文

〔抄 録〕

従来から、曹操が独自の勢力を形成する時に、辟召（公府による辟召）を盛んに行ったことが指摘されている。しかしそれがどのように行われたのか、具体的な分析は必ずしも十分には行われてこなかった。そこで本稿では、漢代の一般的な辟召と対照した時、曹操の行った辟召にどのような特徴が見られるのかを、具体例を提示しながら基礎的な分析を行った。そこからは、従来の辟召では行われなかった、新たな形の辟召の姿が見えてくる。その一つが、現役の官僚（命官）を辟召するというのである。これがいかなる意味を持つのか、本稿ではその一端を提示する。

キーワード 後漢後半期、曹操、公府、辟召、曹操政権論

はじめに

光和七年（一八四年）の黄巾の乱勃発を契機として頭角を現した曹操が権力を握る過程、およびその権力集団の性格については、すでに多くの研究がある⁽¹⁾。また建安元年（一九六）に就いた司空（一九六～二〇八）およびその後の丞相（二〇八～二二〇）在位期間に積極的に行った辟召が、曹操の権力形成過程において極めて効果的だったことについても、すでに多くの研究がある⁽²⁾。

ところで、曹操が積極的に行った辟召（公府による辟召）は、前漢時代に積極的に行われるようになり、後漢時代には、高級官僚への登龍門である察挙制度の孝廉と並ぶほど、主要な登用経路となっていった。筆者は以前に、この漢代辟召制の展開過程を分析したことがある⁽³⁾。それを前提とすれば、曹操が司空・丞相在任中に行った辟召には、漢代の一般的な辟召とは若干異なる面がある。しかしこの点については、従来の研究では必ずしも明らかになっているとはいえないと考える。そこで本稿では、漢代の一般的な辟召と比較した時、曹操の辟召がどのような点に特色が見られるのかについて、基本情報を提示することにする。その意味の具体的検討は、稿を改めることにしたい。

なお本稿では、曹操が司空・丞相と並んで就いている州牧の期間（一九二年～兗州牧、二〇四年～冀州牧）も分析の対象とする。従って、上に示した曹操の司空・丞相在位期間に加えて、

一九二年の兗州牧就任からを分析対象とし、二二〇年の曹操の死までの期間を曹操期と考えることにしたい。

一 一般的な辟召について

周知のように漢代官僚制は、石数で表される官秩によってその上下関係が示され、上は万石の三公から下は百石およびそれ以下（斗食・佐史）の官秩があった。そしてこの官秩構造には、比二百石以上の命官と百石以下の属吏の区分があった。例えば官僚機構の底辺に属する県廷の構造で見れば、比二百石以上の官秩の者が「長吏」で中央から派遣されたのに対し、百石以下の者は「少吏」と呼ばれ、基本的に現地の住民の中から採用された⁽⁴⁾。皇帝からの距離で彼らを見れば、前者の命官・長吏が皇帝の直臣、後者の属吏・少吏は各官庁の長によって選ばれる皇帝の陪臣という関係になる。この皇帝一命官、官長一属吏という二重の君臣関係が、漢代官僚機構には存在するのである⁽⁵⁾。そして後者の官長一属吏の間で結ばれる君臣関係が故吏ということになり、各官府の長官が独自の判断で選任することを辟召制という⁽⁶⁾。

さて漢代辟召制のうち、大將軍や三公（太尉・司徒・司空）が行う辟召、いわゆる公府による辟召は、はじめにも触れたように後漢時代に察挙制度と並ぶほど、高級官僚への登龍門となっていく。それは『続漢書』百官志一・太尉条に、

掾史属二十四人。本注曰、漢旧注：東西曹掾比四百石、餘掾比三百石、属比二百石、故曰公府掾、比古元士三命者也。

とあるように、一般の官府の属吏が原則として百石以下だったのに対して、公府の属吏（掾史属、掾属、掾、属など）は「公府掾」と呼ばれて、その官秩が比四百石～比二百石であり、孝廉に察挙されて一般的に最初に就く郎中が比三百石と比べても懸隔がなかったことによる。

それに加えて後漢時代には、公府に辟召されると「高第」として挙げられて侍御史に就官するというコースが出来上がったこともあって、登用経路として重視されるようになった⁽⁷⁾。曹操期においてもこのような事例を見ることができる。例えば陳羣（『三国志』巻二二。以下、『三国志』からの引用の場合は巻数のみで示す）は、父の死によって官を去った後に、

後以司徒掾举高第、為治書侍御史。

と、司徒（趙溫）に辟召された後に、高第に挙げられて治書侍御史に就官している。これは察挙以外の公府に辟召された例であるが、曹操自身によるものとして、

太祖辟為司空掾、举高第、補侍御史。

とある涼茂（巻一一）のように、司空掾の涼茂を高第に察挙している。また高第以外にも、

入為丞相掾属、举茂才、安陵令。

と、丞相掾属の楊俊を茂才に察挙した例（巻二三）などがある。

このように公府に辟召された者は、基本的には察挙ないし所属官府の長官などの推薦によっ

て、命官に昇進していった。それは、官秩は高いとはいえ、彼らがあくまでも属吏の立場にあったからであり、皇帝の陪臣たる属吏から直臣に立場を変えるためには、察挙などの手続きが不可欠なのであった⁽⁸⁾。これが漢代の一般的な傾向であり、曹操も辟召の基本的な形を守ってはいる。

ところで、公府が辟召する場合、察挙などによって推薦された者が対象となる場合がある。例えば司馬懿(『晋書』卷一宣帝紀)は、

漢建安六年、郡挙上計掾。魏武帝為司空、聞而辟之。

とあるように、上計吏に推薦されたことで曹操の目にとまり、司空府に辟召されている(ただし辞退。後述)。また楊阜(卷二五)は、

〔州牧韋〕端為太僕、其子康代為刺史、辟阜為別駕。察孝廉、辟丞相府。

と、州従事の時に孝廉に察挙されたことによって、丞相府に辟召されている(ただし彼は州の要請により州に留まる。後掲注(37)参照)。

また辟召の対象となるのは、当時盛んに行われた人物評価で一定の評価を得た者(いわゆる「名士」)などが多かった。例えば『三国志』卷一四郭嘉伝注に引く『傳子』には、「曹操は青州・冀州・幽州・并集で名を知られている人物を多く辟召し、彼らを臣下として掾属等に就けた。それは郭嘉の策略によるのだ(河北既平、太祖多辟召青・冀・幽・并知名之士、漸臣使之、以為省事・掾属。皆嘉之謀也)」とあるように、キーとなる人物を介して「知名之士」たちが辟召されたのだろう⁽⁹⁾。能力主義の人材登用を行おうとした曹操にしてみれば、このようなことは当然であろう。曹操はあらゆる手段を使って、有能な人材を採用した。

後漢時代には、察挙や辟召を拒否したり、一旦就官してから病氣や服喪などを理由に官を去ったりすることが盛んに行われるようになり、彼らを再度辟召したり察挙したりする事例が多く見られる⁽¹⁰⁾。曹操は、このようなことも積極的に行う。例えば前に挙げた陳羣は、

挙茂才、除柘令、不行、随〔陳〕紀避難徐州。……属呂布破、太祖辟羣為司空西曹掾属。

とあるように、最初に曹操に司空西曹掾属として辟召される以前に、茂才に察挙されて県令に除されたにもかかわらずそれに就いていない。また和洽(卷二三)は、

挙孝廉、大將軍辟、皆不就。……太祖定荊州、辟為丞相掾属。

とあるように、孝廉に察挙されたり大將軍府に辟召されたりしたが、いずれも就官を拒否した後、丞相掾属に辟召されている。そして邢顒(卷一二)も、

挙孝廉、司徒辟、皆不就。……太祖辟顒為冀州従事。

とあって、冀州牧となった曹操に州従事として辟召される以前に、孝廉察挙および公府(司徒)の辟召をすべて拒否している。また桓階(卷二二)は、

劉表辟為従事祭酒、欲妻以妻妹蔡氏。階自陳已結婚、拒而不受、因辞疾告退。……太祖定荊州、……辟為丞相掾主簿。

と、劉表の辟召を辞退した後、曹操に辟召され丞相掾主簿となっている。

一方、去官後の辟召の事例としては、

遷平陵令。……戮棄官收斂。……曹公平荊州、執戮手曰、何相見之晩也。遂辟為掾。

と、県令の時に官を棄てた後に丞相掾に辟召された趙戮（卷三二注）や、

太祖征馬超、……以達領弘農太守……坐免。太祖心善達、以為丞相主簿。

と、太守（ただし「領」官）を免官となった後に丞相主簿として辟召された賈達（卷一五）の事例などがある。ここに示したように、一般的な辟召の場合、たとえ前任官があったとしても、改めて辟召される時点では、その官を何らかの理由で去っていることが前提である。

なお拒否者・去官者が辟召や察挙の対象になりやすいのは、すでに一定の評価があったからであろう。しかし察挙や辟召を拒否した者のすべてが、その後に素直に辟召に応じるわけではない。韓暨（卷二四）のように何度も察挙や辟召されたにも関わらず、その度に拒否した後、渋々劉表の命令に応じて仕官し、その後曹操の丞相府に辟召された事例もある⁽¹¹⁾。また田疇（卷一一）のように結局、ほとんどすべてを拒否する事例もある。これらは、後漢末の政治情勢の中で、仕官を望まなかった事例として考えられる。それを象徴するのが、司馬懿の事例であろう。彼は、前に示したように上計掾として上京した際に、司空の曹操に辟召されたが、「漢の国運が衰微に向かい、曹操に屈することを快く思わなかったので、病気を理由に辟召を辞退した（帝知漢運方微、不欲屈節曹氏、辞以風痺、不能起居）」のだという（『晋書』卷一）。混乱期にあっては、このような判断は一般的に行われたと考えられる⁽¹²⁾。

以上に見てきたように、曹操は漢代辟召制の原則を踏襲している。特に郭嘉伝に引く『傳子』に記されるように、中心となる人物を介した人材登用を積極的に行った。その積極性の中で、これまでの公府の辟召では見られないような事例も見える。それがどのようなものか、以下に例示してみよう。

二 曹操の行った辟召

いま述べたように司馬懿は病気を理由に曹操の辟召を断ったが、曹操が仮病を疑い、ひそかに人を遣わして確認させたという。そして丞相に就くと曹操はあらためて司馬懿を文学掾に辟召した。司馬懿はこれも躊躇していたが、曹操が使者に「ためらっているようなら、ひっ捕らえてこい」といったことで、恐れて渋々辟召に応じて丞相文学掾に就いたという⁽¹³⁾。ここには司馬懿と曹操との緊張関係も伺われるが、ここで問題にしたいのは、司馬懿が丞相文学掾となってから以降の地位の変化である。『晋書』卷一宣帝紀には、

及魏武為丞相、又辟為文学掾。……遷黃門侍郎、転議郎、丞相東曹属、尋転主簿。

とあり、丞相文学掾となった司馬懿は、黄門侍郎に昇進して議郎に転じた後、官を去ることなくもう一度、丞相府の属吏（丞相東曹属・主簿）に戻っているのである⁽¹⁴⁾。このように辟召された者が、一旦命官に異動した後に官を辞することなく、もう一度同じ官府に属吏として辟

召される例は、曹操期以外には見出せない。「東曹」が「選挙」を掌る重要な部署であった⁽¹⁵⁾といっても、やはり漢代辟召制の一般原則から見れば異例に属する。ここに曹操辟召の特徴があると考ええる。

ところで、曹操は公府の長としては司空から丞相へ、州牧としては兖州牧から冀州牧へと、その地位を変えるが、この地位の変更によって当然そこに所属している属吏たちの所属官府も変更される。この点については、すでに矢野主税氏による指摘がある⁽¹⁶⁾。例えば劉曄（巻一四）は、

太祖還、辟曄為**司空倉曹掾**。太祖征張魯、曄為**主簿**。

とあるように、司空曹掾に辟召された後に丞相主簿に転じている。これは公府間の異動だが、州の属吏から公府の属吏に異動している者も目立つ。例えば毛玠（巻一二）は、

太祖臨兖州、辟為**治中從事**。……太祖敬納其言、**轉幕府功曹**。太祖為司空・丞相、玠嘗為**東曹掾**、与崔琰並典選挙。

とあるように、曹操が兖州牧の時に辟召され治中從事となり、その後幕府（司空府？）功曹に転じ、さらに司空府および丞相府の東曹掾となった⁽¹⁷⁾。これは、官府の長（辟召者）の交代によって辟召しなおされたことと、さらに辟召者の地位の変化（この場合は、同時に持つ二つの立場の別の地位へ）に伴って、属吏の立場も変更されたことを示していると考えられる。毛玠の事例からは、曹操が早くから独特の辟召も行っていることがわかる。そして冀州牧時代に曹操に辟召される例では牽招（巻二六）は、

冀州牧袁紹辟為**督軍從事**、兼領烏丸突騎。……紹卒、又事紹子尚。建安九年、太祖圍鄴。

……太祖領冀州、辟為**從事**。……太祖滅譚於南皮、署招**軍謀掾**、從討烏丸。

とあるように、曹操に辟召される以前に冀州牧の袁紹に辟召され督軍從事となり、袁紹が亡くなると彼を継いだ子供の袁尚にも属吏として仕えた。そして曹操が冀州牧となると、改めて辟召され從事になり、その後、曹操のもう一つの立場である司空府の属吏（軍謀掾）に署される（その後は命官（護烏丸校尉）となる）。牽招と似たような経路は、崔琰（巻一二）⁽¹⁸⁾や崔林（巻二四、後述）もたどっている。

上に掲げた劉曄以下の例は、彼らが曹操に重用されたと考えれば、命官に転出することなく属吏にとどまっていたということも、ある程度理解できるかもしれない。しかし司馬懿の事例は、このような理解だけでは説明できないのである。しかもこのような事例が、曹操の辟召には頻繁に見られる。例えば司馬懿の兄の司馬朗（巻一五）は、

年二十二、太祖辟為**司空掾属**、除成皋令、以病去、復為堂陽長。……遷元城令、入為**丞相主簿**。

とあるように、司空掾属に辟召されてから途中で病気による去官があるものの、丞相主簿に辟召される直前は県令だった。同様のことは梁習（巻一五）についてもいえる。その伝には、

為**郡綱紀**。太祖為司空、辟召為漳長、累転乗氏・海西・下邳令、所在有治名。還為**西曹令**

史、遷為属。

とあり、梁習は、曹操に辟召されて（司空府の属吏となってから？）県長となった後、去官することなく県の長官を歴任し、その治績が評価されて司空府に西曹令史として呼び戻され、その後さらにその府内で属に異動もしている。このように、一旦命官に転出してから再び同じ官府に辟召されたり、同じ公府の中で異動したりする事例は、矢野氏の理解では十分に説明できない。特に梁習のように「任地で治績を挙げた（所在有治名）」者が、昇進ではなく公府に属吏として呼び戻（辟召）されることは、漢代の一般的な辟召では考えられない。

以下に、多数見られるこのような事例を、曹操の司空期と丞相期に分けて紹介し、そこに見える特色を確認しよう。なお司空期に辟召された者は、丞相期にもう一度辟召される場合もある（ここまでに例示してきた人物の多くがこの事例になる）。また同時期に兼任している兖州牧と冀州牧のうち、兖州牧としての辟召は司空期に入れるが、冀州牧は二〇四～二二〇年と司空・丞相期の両方にわたり判断が難しい場合がある。これらを勘案しながら、以下に列挙しよう。

三 司空期の辟召

まず司空期に辟召された者たちについて検証しよう。最初に、司馬朗や梁習と同じように県の長官から直接辟召された邢顒（卷一二）の場合を見てみよう。前に紹介したように、曹操に冀州從事として辟召される以前に、司徒の辟召や察挙を拒否しているが、冀州從事に辟召されてから彼は、

除広宗長、以故将喪棄官。……更辟司空掾、除行唐令。勸民農桑、風化大行。入為丞相門下督、遷左馮翊、病去官。……遂以為平原侯植家丞。……後參丞相軍事、轉東曹掾。……後遂以為太子少傅、遷太傅。文帝踐阼、為侍中尚書僕射、賜爵關内侯。

と、県長に除されて棄官の後、曹操から更めて司空掾に辟召されて県令に除される。ここまでは後漢辟召制の一般的パターンではあるが、前の梁習と同じように、県令としての治績が評価されて、丞相門下督という属吏に戻っている⁽¹⁹⁾。その後いきなり左馮翊という太守に転出しているのも、異例だとはいえる。そして左馮翊を病気で去った後、侯家丞として官に復帰し、參丞相軍事⁽²⁰⁾となるが、またしても東曹掾という属吏に転じているのである。その後は、太子少傅・同太傅という曹丕の側近を務め、漢魏革命後は侍中僕射となって命官として官位を進めていくが、彼のように命官と属吏を往復する事例は、曹操期以前には見えない。

これまで紹介した命官から曹操に辟召された事例は、公府の属吏の官秩と同等か若干上位の県長から県令クラス（官秩三百石～千石）だった。しかしこのような事例は、二千石の太守クラスの者の場合もあるのである。まず袁術からの辟召を拒否して山中に逃亡した何夔（卷一二）は、

太祖辟為司空掾屬。……出為城父令。遷長広太守。……徵還、參丞相軍事。海賊郭祖寇暴樂安・濟南界、州郡苦之。太祖以夔前在長広有威信、拜樂安太守。到官数月、諸城悉平。入為丞相東曹掾。……魏国既建、拜尚書僕射。

とあるように、曹操から司空掾屬に辟召される。その後地方官に転出して県令・太守を務めた後、參丞相軍事として丞相府に呼び戻され、先に長広太守の時に「威信」があったことによって治安維持に苦しむ郡の太守に転出し、その安定をまって丞相府に還っている。このように曹操は、太守であっても地方行政の治績を高く評価して、県の長官と同じように自らの丞相府に辟召しているのである。何夔は、司空掾屬の時代には曹操と多少の緊張関係があったようであるが⁽²¹⁾、その後は曹操から信頼を寄せられていたようで、魏国成立後に尚書僕射となり、曹丕が魏国の太子となると太子少傅・同太傅を歴任している。

鄭渾（卷一六）は、

太祖聞其篤行、召為掾、復遷下蔡長・邵陵令。……辟為丞相掾屬。遷左馮翊。……転為上黨太守。……太祖征漢中、以渾為京兆尹。……太祖益嘉之、復入為丞相掾。文帝即位、為侍御史、加駙馬都尉。

とあり、（司空）掾として辟召されて転出し県長・県令を歴任後に、丞相掾屬に辟召される。この際も梁習や邢顒と同じように、任地での善政が評価されたようである⁽²²⁾。問題はその後である。彼は邢顒と同じく、丞相掾屬からいきなり左馮翊に転出しており、その後上党太守・京兆尹という太守職を歴任、京兆尹の事績を評価されて（「太祖益嘉之」）丞相掾に復帰しているのである。この属吏から太守への転出、そして太守を歴任しての属吏への復帰というのは、一般的な漢代辟召では考えられない。

その他、陳矯（卷二二）・徐宣（卷二二）・趙儼（卷二三）も同じような異動になっている。陳矯は、

太祖辟矯為司空掾屬、除相令、征南長史、彭城・樂陵太守、魏郡西部都尉。……遷魏郡太守。……大軍東征、入為丞相長史。軍還、復為魏郡、転西曹屬。從征漢中、還為尚書。……帝既踐阼、転署吏部、封高陵亭侯。

とあり、司空掾屬から丞相西曹屬に戻るまで多様な異動を経ているが、丞相府に戻る直前が魏郡太守であり、それ以前には、公府の長の補佐役ともいえる丞相府の長史にも就いているのである⁽²³⁾。また徐宣は、

太祖辟為司空掾屬、除東緡・兗干令、遷齊郡太守、入為門下督。……会馬超作乱、……乃以宣為左護軍、留統諸軍。還為丞相東曹掾、出為魏郡太守。帝既踐阼、為御史中丞、賜爵關内侯。

とあり、司空掾屬から地方官位転出し、門下督に戻る直前は太守であり、門下督から左護軍に転出して丞相東曹掾に還り、さらに太守に転出して漢魏革命を迎える。趙儼は、

建安二年、年二十七、遂扶持老弱詣太祖。太祖以儼為朗陵長。……入為司空掾屬主簿。

……太祖征荊州、以儼領章陵太守、徙都督護軍。……復為丞相主簿、遷扶風太守。
とあって、県長から司空府に辟召され、太守に転出後、都督護軍を経て丞相主簿に復帰し、その後さらに太守に転出し、地方官・武官系統の官を中心に異動している。

以上のような事例を最も端的に示しているのが令狐邵（巻一六注）の場合であろう。

署軍謀掾。仍歴宰守、後徙丞相主簿、出為弘農太守

と、公府（属吏）と地方長官（太守）との往復のさまを如実に示している。このようになれば、もはや属吏と命官の区別が希薄化しているといわざるを得ない。

司空期の最後にもう一つ徐奕（巻一二）の事例を掲げておこう。そこには、

太祖為司空、辟為掾属、從西征馬超。超破、軍還。時関中新服、未甚安、留奕為丞相長史、鎮撫西京、西京称其威信。転為雍州刺史、復還為（丞相）東曹属。……出為魏郡太守。太祖征孫權、徙為留府長史。……魏国既建、為尚書、復典選舉、遷尚書令。

とあって、司空掾属から丞相東曹属に至るまでの間に、陳矯と同じく丞相長史を経験し、さらに直前の官位は刺史であった。刺史は、本来六百石という県令並の官秩であったが、州牧制の導入によって二千石の官となるなど様々な変遷をたどり、やがて軍事的な要素も加わり地方における重要な官府となる⁽²⁴⁾。彼の場合、後に太守へと転出し、魏国成立後は、その中枢ともいえる尚書系列の官で、「選舉」を担当している。

以上の例から見ると、複数回にわたって曹操の公府に辟召される間に、県クラスの長官のみではなく、太守・国相といった郡レベルの長官経験者も多く存在し、しかも去官ではなく、現職からそのまま公府へ辟召しているのである。はては、丞相府の補佐役である長史（命官）経験者が、後に丞相府の属吏に辟召されている例も確認できる。このようなことから見れば、曹操の行った辟召というのは、従来型の命官・属吏といった地位の差異を超越した形での人事異動を行っていたといえるのではなかろうか。次に丞相期の辟召について検証しよう。

四 丞相期の辟召

最初に、司空期か丞相期か判断に困る冀州牧・曹操による辟召の例を示しておこう。崔林（巻二四）は、

太祖定冀州、召除鄆長。貧無車馬、単歩之官。太祖征壺関、問長吏德政最者、并州刺史張陟以林対。於是擢為冀州主簿、徙署別駕・丞相掾属。魏国既建、稍遷御史中丞。

とあって、冀州牧の曹操に見出されて県長となるが、前に掲げた梁習や邢顒と同じく、そこでの治績が良好だった（「長吏德政最者」）ため、并州刺史の張陟の推薦によって、冀州主簿に辟召されて曹操の元に戻っている。その後、州と丞相府の属吏を務めて、魏国が成立すると御史中丞に昇進していく⁽²⁵⁾。

胡質（巻二七）は、

少与蔣濟、朱續俱知名於江淮間、仕州郡。蔣濟為別駕、使見太祖……太祖即召質為頓丘令。……入為**丞相東曹議令史**、州請為**治中**。……太祖辟為**丞相屬**。黄初中、徙吏部郎。

とあり、揚州別駕・蔣濟の紹介によって曹操の知遇を得、曹操に召されて県令となった。(県令の治績も評価されたのであろう) 丞相府の東曹議令史に辟召され、州の願いによって州の治中となっている。このように公府に辟召されながら、州の申し出により州の属吏となるという事例も珍しい。後掲の蔣濟の事例と照合すれば、当時の州の位置づけの変化が読み取れそうである。それはともあれ、その後再び曹操に辟召されて丞相属となると、魏王朝の成立後の黄初年間に吏部郎に就くまでその地位に留まっている。

この二例は、県の長官の時に辟召されて属吏のままで異動しながら、その後命官に転出すると、再び属吏に戻ることはなかった。しかし次の高柔(巻二四)の例は、司空期の特異な事例と共通している。そこには、

太祖平袁氏、以柔為菅長。……高幹既降、頃之以并州叛。柔自歸太祖、太祖欲因事誅之、以為**刺奸令史**。所法允当、獄無留滯。辟為**丞相倉曹属**。……魏国初建、為尚書郎。轉拜**丞相理曹掾**。……遷為潁川太守、復還為**法曹掾**。……文帝踐阼、以柔為治書侍御史、賜爵關内侯。

とあり、袁氏を滅ぼした曹操から県長に推薦されるが、従兄の高幹の反乱(二〇六年)が起これ、彼は曹操に帰順したものの疑われ、何らかの口実によって誅殺するために「刺奸令史」に辟召される。これがどこの官府の属吏かはよくわからない。しかし後に、この職を滞りなくこなしたことから、丞相府に倉曹属として辟召される⁽²⁶⁾。その後、魏国成立に伴って尚書郎となった後に、またもや丞相理曹掾という属吏に異動する。その後に太守に転出し、またも丞相府の法曹掾に還って、そのまま漢魏革命を迎える。その異動は、邢顒と並ぶほど公府の属吏と命官を頻繁に往復した事例として特筆すべきものだろう。

次に、司空期にもあった県の長官で辟召され太守に転出した事例を紹介しておこう。まず前に辟召や察挙を拒否した者の事例として紹介した韓暨(巻二四)は、

除宜城長。太祖平荊州、辟為**丞相士曹属**。後選樂陵太守。

とあるように、県長の時に辟召されて、その後樂陵太守に転出している。また裴潛(巻二三)は、

遂南適長沙。太祖定荊州、以潛參丞相軍事、出歷三県令、入為**倉曹属**。……時代郡大乱、以潛為代郡太守。……在代三年、還為**丞相理曹掾**、……潛出為沛国相、遷兗州刺史。

とあり、荊州牧の劉表の誘いを断って長沙に逃れた後、曹操の参丞相軍事となり、県令を歴任して丞相倉曹属に辟召される。その後に太守に転出、そこでの治績が評価されたのだろう⁽²⁷⁾、三年後に丞相理曹掾に還っている。それからまた国相に転出し、刺史で漢魏革命を迎える。その他に、前に公府の属吏から察挙されて転出した例として掲げた楊俊も、県長の時に辟召されている。曹操の辟召では、現職の県の長官を辟召することが一般化していたといえる。それは、

（立場的には属吏と命官は異なるが）官秩的に公府属吏と懸隔がなかったというのが、一つの理由なのだろう。

ところで司空期の辟召では、太守で最初に辟召されることはなく、司空府に辟召され命官に転出して、その後に辟召される時に太守の例はあった。しかし丞相期では、太守の時にはじめて辟召される事例がある。王凌（卷二八）は、

挙孝廉、為兗干長。稍遷至中山太守、所在有治。太祖辟為丞相掾属。文帝踐阼、拜散騎常侍、出為兗州刺史。

とあるように、孝廉に察挙された後、県長を出発点に太守まで昇進し、その治績が評価されて、丞相掾属として辟召される。その後は、漢魏革命まで属吏にとどまり、散騎常侍となり、その後は刺史や將軍等を歴任する。温恢（卷一五）も、

挙孝廉、為廩丘長、鄢陵・広川令、彭城・魯相、所在見称。入為丞相主簿、出為揚州刺史。とあって、やはり地方官としての治績が評価されて丞相府に主簿として辟召されている。その後は、揚州刺史に転出する。彼らは、県の長官の治績が評価されて曹操に辟召されたのと同様に、太守の治績が評価されて辟召されたのだろう。なお、丞相府の属吏から刺史に転出した例としては、司馬朗がある。そして王凌も、散騎常侍の就任を挟んでいるものの、その後刺史へと転出する。州牧と州刺史が錯綜する当時において、その持つ意味が増してきていることは間違いない。

このような観点から注目したいのが、温恢が揚州刺史に転出した際に、その別駕となった蔣済（卷一四）に関する記事である。そこには、

拜済丹陽太守。大軍南征還、以温恢為揚州刺史、済為別駕。令曰「季子為臣、吳宜有君、今君還州、吾無憂矣」。民有誣告済為謀叛主率者、太祖聞之、指前令与左將軍于禁・沛相封仁等曰「拜済寧有此事、有此事、吾為不知人也。此必愚民衆乱、妄引之耳」。促理出之。辟為丞相主簿西曹属。……文帝即王位、転為相国長史。

とある。州別駕となってから丞相主簿掾属に辟召されるのは、一般的な辟召の事例と考えてもよい。しかし問題は、州別駕になる直前の地位が太守だったことである。これは特別の人事だったようで、曹操が「令」を出して「君が州に（別駕として）還ってくれば、私も憂えがなくなる（今君還州、吾無憂矣）」とっている。この事情は温恢伝にも記されている。そこには、

〔温恢〕出為揚州刺史。太祖曰「甚欲使卿在親近、顧以為不如此州事大。故書云『股肱良哉、庶事康哉』。得無不当得済為治中邪」。時済見為丹陽太守、乃遣済還州。又語張遼・樂進等曰「揚州刺史曉達軍事、動静与共咨議」。

とあり、温恢が揚州刺史に就任するにあたって、曹操は、温恢を側近として置いておきたいが、揚州の重要性に鑑みて彼を刺史に就けたい（「甚欲使卿在親近、顧以為不如此州事大」といい、その補佐役（「治中」。蔣済伝では「別駕」）は蔣済をおいて他はない（「得無不当得済為治中邪」）として、蔣済を太守から州の属吏に還らせると判断している。それに続けて、將軍の張

遼や楽進らに、刺史の温恢は軍事に通暁しているので行動を協議するようにと、わざわざ通達している。曹操は、その際の人事に自信を持っていたようで、蔣済伝には、蔣済が謀反の首謀者であると民が誣告したことに対して、「もしもそれが本当であれば、私は人材を見抜けないことになる（蔣済寧有此事、有此事、吾為不知人也）」と言って、蔣済に絶対の信頼を寄せている。軍事的な重要地点となっていた揚州に、信頼を寄せる温恢と蔣済を配置し、その安定を図ろうとしたのだろう。しかしそれに伴って無理な人事を行った。当時にあっても現職の命官（特に長吏）を属吏に呼び戻すなど、普通はあり得なかった。その表れが、二人の伝に残された曹操の言葉になるのだろう。

しかし、この事例は自身が長を務めていない官府の人事であった。曹操自身が長を務める司空府や丞相府（兗州や冀州も？）では、そのようなことを気にせずに人事を行った。それが、これまで見てきたような、現職の命官を属吏に辟召する事例になるのだろう。

ここでもう少し、刺史の位置づけに関わる事例を見ておこう。梁習は、司空属となった（前掲）後に別部司馬領并州刺史となる。やがて領官ではなく真官の刺史となるが、その間すぐれた行政を行い「これまでの刺史で梁習に匹敵する者はいない（刺史未有及習者）」といわれるほどになる⁽²⁸⁾。そして建安一八年（二一三）に并州が冀州に併合されると、梁習は議郎・西部都督從事に就く。この（冀州の）西部都督從事という地位は属吏だと考えられるが、これを漢魏革命時まで務め、并州が復活すると并州刺史に復帰している⁽²⁹⁾。これも特例であろうが、重要な人材は属吏としてでも自らの手元に置いておこうとしているのではなかろうか。

五 その他の特徴的な辟召

さて、ここまでは曹操が自らの官府に辟召した事例を紹介した。そこに見える特徴的な辟召は、曹操の息子たちが就いた地位の属吏採用とも密接にかかわっている。建安一六年（二一一）に、曹操の長子・曹丕が五官中郎将となると、その兄弟たちも列侯に封ぜられた⁽³⁰⁾。曹丕の五官中郎将はこの時新たに「官属」を持つようになり⁽³¹⁾、列侯には元から若干数の属吏が配当されていた⁽³²⁾。この属吏にも、曹操に辟召された者が配置されている。

まず曹丕とのかかわりから見ていこう。劉廙（卷二一）は、

太祖辟為丞相掾属、転五官将文学。……魏国初建、為黄門侍郎。……魏諷反、廙弟偉為諷所引、当相坐誅。……特原不问、徙署丞相倉曹属。……文帝即王位、為侍中、賜爵関内侯。とあるように、まず曹操の属吏（丞相掾属）から曹丕の属吏（五官将文学）へ異動して、魏国の命官となり、兄弟の罪に連座して誅殺されるところを許され、曹操の属吏に復帰している。徐幹（卷二一附）も

幹為司空軍謀祭酒掾属、五官将文学。

とあるように、曹操の属吏から曹丕の属吏に移っている。

一方盧毓（卷二二）は、

以学行見称。文帝為五官将、召毓署門下賊曹。崔琰举為冀州主簿。……由是為丞相法曹議令史、転西曹議令史。魏国既建、為吏部郎。文帝踐阼、徙黃門侍郎。

とあって、まず曹丕の属吏（五官将門下賊曹）から、崔琰の推薦をきっかけに曹操の属吏（冀州主簿→丞相法曹令史→西曹議令史）を歴任して、魏国成立に伴って命官に異動した。

郭淮（卷二六）も盧毓と同じような異動をしている。

建安中举孝廉、除平原府丞。文帝為五官将、召淮署為門下賊曹、転為丞相兵曹議令史。

……太祖還、留征西將軍夏侯淵拒劉備、以淮為淵司馬……有疾不出……復以淮為司馬。文帝即王位、賜爵関内侯、転為鎮西長史。

彼は、孝廉に察挙されて平原府丞に除されてから、五官中郎将・曹丕の属吏（五官将門下賊曹）に辟召され、その後、曹操の属吏（丞相兵曹議令史）に異動している。その後は命官として、どちらかといえば武官職を中心に異動していく。彼が孝廉に察挙されて最初に就いた平原府丞がどのような部署なのかも一つ判然としない⁽³³⁾が、次に掲げる常林（卷二三）の例は、これまで分析してきた曹操の辟召とのかかわりでも注目される。そこには、

并州刺史高幹表為騎都尉、林辞不受。後刺史梁習薦州界名士林及楊俊・王淩・王象・荀緯、太祖皆以為県長。……超遷博陵太守・幽州刺史、所在有績。文帝為五官将、林為功曹。……出為平原太守・魏郡東部都尉、入為丞相東曹属。魏国既建、拜尚書。文帝踐阼、遷少府、封楽陽亭侯。

とあり、并州刺史梁習の推薦によって県長になってから太守・刺史を歴任、その治績が評価されて曹丕の属吏（五官将功曹）となっている。太守に転出の後、曹操の属吏（丞相東曹属）に戻るが、やはり太守をはじめとする地方での治績が辟召のきっかけとなっているようである。その意味では、曹操の辟召と同じと考えてよいのではないか。

次に曹植の属吏となった者を見ておこう。応瑒（卷二一附）は、

（応）瑒・（劉）楨各被太祖辟為丞相掾属。瑒転為平原侯庶子、後為五官将文学。

とあって、曹操に辟召されてから、平原侯の曹植と曹丕の属吏を経験している。またここに名前の挙がっている劉楨も、『三国志』では応瑒の記事に続いて「楨以不敬被刑、刑竟署吏」とあり、丞相掾属の時に罪に問われて誅殺されたように記されるが、『後漢書』伝七〇下劉梁伝に引く『魏志』では、

楨字公幹、為司空軍謀祭酒・五官郎将文学、与徐幹・陳琳・阮瑀・応瑒俱以章知名、転為平原侯庶子。

とあり、ここでは、曹操が司空の時に軍謀祭酒となり、その後、五官将文学から平原庶子に移ったことになっており、邢顒伝にも平原侯の「庶子劉楨」として出てくるから、応瑒の場合と就く順序は異なるが、同じような異動経路をたどったのだろう⁽³⁴⁾。

次に建安二二年（二一七）に列侯に封ぜられた歴城侯曹徽の属吏となった高堂隆（卷二五）

の場合を見ておこう。彼は、

建安十八年、太祖召為丞相軍議掾、後為歷城侯文學、転為相。

とあって、曹操の属吏から歴城侯文学となり、その後、その侯国の相（長官）になっている。属吏からその侯国の相となるのも異例であろう。

以上、曹操の辟召を受けている者のみを挙げたが、曹丕の五官中郎将府の属吏やその他列侯の属吏については、別の角度から検討する必要があると考える。それは端的に言えば「文学」の位置づけである⁽³⁵⁾。この点については、稿を改めて検討したい。

最後に、特異な事例と考えられるものを掲げておこう。それは、爵位の賜与に関わるものである。王粲（卷二一）は、

年十七、司徒辟、詔除黄門侍郎、以西京擾乱、皆不就。……太祖辟為丞相掾、賜爵関内侯。……後遷軍謀祭酒。魏国既建、拜侍中。

とあって、曹操に辟召されるまでは、国内の混乱によって就官しなかった。ところが曹操に丞相掾に辟召されると、関内侯という爵位まで賜っている。関内侯は、列侯に次ぐ爵位で普通は高級官僚が賜る爵位である⁽³⁶⁾。それを属吏が受けるという異例なことが行われているのである。

これと似た事例は、他にも見出せる。衛臻（卷二二）は、

後為漢黄門侍郎。東郡朱越謀反、引臻。太祖令曰「孤与卿君同共举事、加欽令問。始聞越言、固自不信。及得荀令君書、具亮忠誠」。会奉詔命、聘貴人于魏、因表留臻參丞相軍事。追録臻父旧勲、賜爵関内侯、転為戸曹掾。

とあり、漢の黄門侍郎の時に朱越の反乱に誘われた彼に対して、曹操が、彼の父衛慈とのかかわりも絡めて、衛臻が朱越の反乱に加担しないことを信じるということをいい、彼が魏に來た機会をとらえて引き止めて參丞相軍事とし、それに加えて父の「旧勲」によって衛臻に関内侯の爵位を与えた。そしてその後衛臻は、戸曹掾に辟召されている。王粲とは順序が異なるが、爵位を持った属吏であることには変わりなかろう⁽³⁷⁾。賜爵の対象となるような功績を上げているのだろうが、属吏での賜爵というのは漢代的な論理からすれば異例に属するといわざるを得ないだろう。

おわりに

曹操は、建安元年（一九六）に司空となると積極的に辟召を行ったが、その時、基本的には漢代辟召制の手続きを踏襲した。しかしながら異例な辟召も目立つようになってくる。それは、漢代辟召制でもあった命官経験者を辟召することである。ただし一般の辟召では、命官経験者が再び辟召される時はさまざまな理由により無官の状態だったが、曹操の辟召では、現職の命官を直接辟召する事例が出てくる。それでも当初は、県長や県令など公府の掾属と官秩的には

懸隔の少ないものだったが、やがて太守や当時地位を向上させつつあった刺史などを、現役のまま辟召するようになる。

さらに、漢代辟召制では辟召した者を一旦命官へと送り出せば、基本的には再び辟召することとはなかった。ところが曹操は、一旦命官へ送り出した者を、たびたび属吏として自己の官府へ呼び戻し、さらにまた命官に送り出すというを行う。この結果、漢代においては、命官と属吏の区分が明確であったものが、曹操期には、曹操の周辺を中心として命官―属吏の区分が希薄化していくのである。これが、曹操による辟召の特色だと考える。三国期以降の官品制による官僚構成は、それまでの官秩制によるそれとは大きく変わるのも、この影響を受けているのかもしれない。

曹操がこのような辟召を行ったのは、例えば建安一五年（二一〇）に出される「求賢令（求才令）」をはじめ、曹操の能力主義による人材登用（唯才主義）を実行するためだったと考えられる。それ故に、地方官を現役のまま辟召する際に、「地方行政に実績を上げた」ことが理由にされるのであろう。このような辟召を行えば、自身の官府（司空府・丞相府、そして兖州と冀州）に有能な人材を集めることができる。一方で、このようにして集めた属吏を朝廷や地方に命官として送り出せば、自派の形成が有利に進められる。そのようなこともあって、建安一八年（二一三）に魏公となって独自の官僚機構を持つてからも、曹操は丞相・冀州牧という漢の官僚の地位も保持したのではなかろうか⁽³⁸⁾。

曹操は、丞相府を中心として、冀州の官府および魏国の機構も巧みに使いながら、漢の側の有能な人材を取り込んでいった。その際に重要な役割を果たすのが、丞相府の「東曹」、魏国の「尚書」という、「選挙」を扱う部局ではなかっただろうか。漢から魏への交替が目前に迫ってきた建安二三年（二一八）に、漢の太医令・吉本と少府の耿紀らが丞相司直の韋晃とともに、丞相長史の王必の営を襲ったのも⁽³⁹⁾、巨大化した丞相府が必ずしも一枚岩になっていなかった表れであろう。しかし、それで丞相府を中心とする曹操の集団は、簡単に崩れることなく、漢から魏への革命を成功させた。

このように考えた時、宮崎市定氏が指摘したような、魏の官僚機構へ漢の官僚を取り込む際に反魏分子に対する選別機能を、九品官人法がどこまで果たしたのか、再検討の余地があるようにも思える⁽⁴⁰⁾。

いずれにしても本稿では、曹操の行った辟召について、特徴的な部分の例示にとどまる。これをどのように理論化し、それをいわゆる曹操政権論にどのように結びつけるのかは、今後の問題になる。

〔注〕

- (1) 曹操政権論については、川勝義雄「曹操軍団の構成について」（同『六朝貴族制社会の研究』所収、岩波書店、一九八二年、一九五四年初出）、五井直弘「曹操政権の性格について」（同『漢代の豪族社会と国家』所収、名著刊行会、二〇〇一年、一九五六年初出）、好並隆司「曹操の時代―

- 五井氏の所論について」(『歴史学研究』二〇七、一九五七年)、好並隆司「魏王朝成立過程試論」(杉本直治郎・沖野舜二編『社会科教育 歴史・地理研究論集』、一九五七年)、矢野主税「後漢曹魏交替史序説」(『門閥社会史』所収、長崎大学史学会、一九六五年、一九六三年初出)、片倉穰「曹操政権の成立過程——とくに曹操軍団と黄巾について——」(『歴史教育』一七一三、一九六九年)、好並隆司「曹操政権論」(『岩波講座 世界歴史』五、岩波書店、一九七〇年)、丹羽兌子「曹操政権論ノート」(『名古屋大学東洋史研究報告』二、一九七三年)、矢野主税「曹操集団の性格の一考察」(『門閥社会成立史』所収、国書刊行会、一九七六年)、堀敏一「曹操政権と豪族」(『明治大学人文科学研究所紀要』三九、一九九六年)、渡邊義浩「曹操政権の形成」(同『三国政権の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四年。二〇〇一年初出)、好並隆司「曹魏王国の成立」(同『後漢魏晉論攷——好並隆司遺稿集』所収、溪水社、二〇一四年、二〇〇八年初出)などを参照。
- (2) 曹操の辟召については、五井直弘「後漢時代の官吏登用制「辟召」について」(同氏前掲書所収、一九五四年初出)、矢野主税「漢魏の辟召制研究——故吏問題の再検討」(『長大史学』三、一九五九年)、福井重雅「漢の察舉制度から魏の九品官人法へ」(同『漢代官吏登用制度の研究』所収、創文社、一九八八年)などを参照。
- (3) 拙稿「漢代辟召制の確立」(『鷹陵史学』一五、一九八九年)。
- (4) 官秩表記については、例えば『統漢書』百官志五に「百官受奉例：大將軍・三公奉、月三百五十斛。中二千石奉、月百八十斛。二千石奉、月百二十斛。比二千石奉、月百斛。千石奉、月八十斛。六百石奉、月七十斛。比六百石奉、月五十斛。四百石奉、月四十五斛。比四百石奉、月四十斛。三百石奉、月四十斛。比三百石奉、月三十七斛。二百石奉、月三十斛。比二百石奉、月二十七斛。一百石奉、月十六斛。斗食奉、月十一斛。佐史奉、月八斛。凡諸受奉、皆半錢半穀」とある。
- また県廷については、『漢書』卷一九百官公卿表上に「県令・長、皆秦官、掌治其県。万户以上為令、秩千石至六百石。減万户為長、秩五百石至三百石。皆有丞・尉、秩四百石至二百石、是為長吏。百石以下有斗食・佐史之秩、是為少吏」とある。
- (5) 漢代官僚機構の特色については、渡辺信一郎『中国古代国家の思想構造——専制国家とイデオロギー』(校倉書房、一九九四年)所収の「孝経の国家論」(一九八七年初出)および「中国古代専制国家論」(一九九二年初出)を参照。
- (6) 一般的には、辟召権は三公・大將軍および刺史(牧)が持っていると限定的に考えるが、筆者は広く官府の長官が独自の判断で行う属吏採用を辟召と考えている。その詳細については、前掲注(3)拙稿を参照。
- (7) この点については、永田英正「後漢の三公にみられる起家と出自について」(『東洋史研究』二四一三、一九六五年)、同「漢代の選挙と官僚階級」(『東方学報』京都四一、一九七〇年)、福井重雅「後漢の辟召制度——その有資格者の範囲をめぐって——」(前掲注(2)同氏前掲書所収、一九八七年初出)、および前掲注(3)拙稿を参照。
- (8) 同上拙稿を参照。
- (9) 梁習も刺史の時に地元の人材を曹操の幕府に送っている(卷一五)。後掲注(8)参照。
- (10) 登用拒否の意味については、鈴木啓造「後漢における就官の拒絶と棄官について——「徴召・辟召」を中心として」(中国古代史研究会編『中国古代史研究』二所収、一九五九年)、福井重雅「後漢の選挙における推挙の辞退」(『東方学』五七、一九七九年。のち前掲注(2)同氏前掲書に改稿して所収)、拙稿「後漢の官吏登用法に関する二・三の問題」(『佛敎大学大学院研究紀要』一五、一九八七年)を参照。
- (11) 卷二四本伝に「孝廉、司空辟、皆不就。……避袁術命召、徙居山都之山。荆州牧劉表礼辟、遂遁逃。……表深恨之。暨懼、応命、除宜城長。太祖平荆州、辟為丞相士曹属。後選楽陵太守……」とある。なお韓暨は、楽陵太守となつてからは、順調に昇進していき太常で生涯を終える。

- (12) この点については、前掲注(10)拙稿を参照。
- (13) 次に本文で引く文章の前後に「魏武使人夜往密刺之、帝堅臥不動。及魏武為丞相、又辟為**文學掾**、敕行者曰、若復盤桓、便収之。帝懼而就職。於是使与太子游处」とある。前の話とも合わせると、司馬懿をどうしても手元に置きたい曹操と、曹操から距離を置きたい司馬懿との緊張関係が伺われる。しかしこれが『晋書』という司馬氏寄りの記事であり、その後の曹操や曹丕との親密さから見ると、多少割り引いて考えなければなるまい。
- (14) ここでは、曹操辟召の特色も勘案して議郎についてから丞相属吏になったと判断した。しかし本文に引いた記事からは、議郎と丞相東曹属の関係がもう一つ判然としない。彼が就いた議郎は、漢の側の官であろうが、この記事の通り見れば、議郎と丞相東曹属を兼任しているようにも見える。
- (15) 『統漢書』百官志一・太尉条に「西曹主府史署用。東曹主二千石長吏遷除及軍吏」とある。
- (16) 前掲注(2)矢野論文参照。
- (17) ここに記される幕府功曹と東曹掾の就任時期は、判断に困る部分がある。本文では、功曹になってから掾に就いたと判断したが、東曹掾への就任について「嘗」が使われ、功曹の前の可能性も完全に払拭できない。その場合、幕府功曹の「幕府」は丞相府を指すことになる。
- (18) 卷一二の本伝は「大將軍袁紹聞而辟之。……紹以為騎都尉。……及紹卒、二子交争、争欲得琰。琰称疾固辞、由是獲罪、幽于囹圄、頼陰夔・陳琳宮救得免。太祖破袁氏、領冀州牧、辟琰為**別駕從事**。……太祖為丞相、琰復為東西曹掾属徵事。初授**東曹**時……。魏国初建、拜尚書」と記す。彼の場合、その異動経路が追いにくい。特に、曹操とのかかわりで、東西曹掾属徵事（命官）就任以前に、東曹（掾属？）としていつ辟召されたのが不明である。
- (19) ちなみに司馬朗は、堂陽長の時の事績として「復為堂陽長。其治務寛惠、不行鞭杖、而民不犯禁。先時、民有徙充都内者、後県調当作船、徙民恐其不辦、乃相率私還助之、其見愛如此。遷元城令」とある。辟召直前の事は詳しくは分らないが、怒らく梁習・邢顒と同じように、県令としての治績を評価されたことが辟召のきっかけとなっているのではなかろうか。
- (20) この時期の参軍事については、石井仁「参軍事考——六朝軍府の起源をめぐる」（『文化』五一—三・四、一九八八年）、および同「参軍事の研究」（『三国志研究』一〇、二〇一五年）を参照。
- (21) 卷一二本伝には「太祖性嚴、掾属公事、往往加杖。夔常畜毒藥、誓死無辱、是以終不見及」とある。
- (22) 卷一六本伝に「天下未定、民皆剝輕、不念産殖。其生子無以相活、率皆不举。渾所在奪其漁獵之具、課使耕桑、又兼開稻田、重去子之法。民初畏罪、後稍豊給、無不举贍。所育男女、多以鄭為字」とあるように、彼は農業政策に力を入れている。
- (23) 『統漢書』百官志一・太尉条に「長史、一人、千石。本注曰、署諸曹事」とある。丞相府の長史の職務も同様と考えられる。
- (24) 州の位置づけの変化についての概要は、紙屋正和「漢時代における郡県制と州牧・刺史」（同『漢時代における郡県制の展開』所収、朋友書店、二〇〇九年）を参照。
- (25) なお県長に除される際に曹操に「召」された時、属吏となったか否か微妙であるが、さらに解釈に困るのが、冀州主簿から異動した州別駕と丞相掾属の関係である。州別駕から丞相掾属に異動したと考えるのが妥当なのだろうが、この文章だけでは判然としない。
- (26) ちなみに、ここで「辟」字が使われていることから、「刺奸令史」は丞相府以外の官府だった可能性が高い。曹操の辟召の事例を見ていると、最初に辟召した際には「辟」字が使われるが、二度目以降は（辟召する官府が異なっても）「入」「還」「転」「遷」「徙」などが使われる傾向にある。詳しくは、別稿に譲ることにしたい。
- (27) 卷二三本伝に「以潜為代郡太守。烏丸王及其大人、凡三人、各自称单于、専制郡事。前太守莫能治正、太祖欲授潜精兵以鎮討之。潜辞曰、……。遂单車之郡。单于驚喜。潜撫之以静。单于以下脱帽稽顙、悉還前後所掠婦女・器械・財物。潜案誅郡中大吏与单于為表裏者郝温・郭端等

- 十餘人、北辺大震、百姓帰心。」とあるように、代郡でほしいままの行動をとっていた烏丸の「单于」たちを武力によって威圧するとともに、彼らと結託していた「大吏」を肅清した。
- (28) 梁習伝(卷一五)に「并土新附、習以別部司馬領并州刺史。時承高幹荒乱之餘、胡狄在界、張雄跋扈、吏民亡叛、入其部落。兵家擁衆、作為寇害、更相扇動、往往基時。習到官、誘諭招納、皆礼召其豪右、稍稍薦擧、使詣幕府。豪右已盡、乃次發諸丁彊以為義從。又因大軍出征、分請以為勇力。吏兵已去之後、稍稍移其家、前後送鄴、凡數萬口。其不從命者、興兵致討、斬首千數、降附者万計。单于恭順、名王稽顙、部曲服事供職、同於編戶。辺境肅清、百姓布野、勤勸農桑、令行禁止。貢達名士、咸顯於世、語在常林伝。太祖嘉之、賜爵関内侯、更拜為真。長老称詠、以為自所聞識、刺史未有及習者」とある。高幹の乱(二〇六年)の余韻を收拾するため、叛乱の中心となりそうな「豪右」を「幕府」に推薦するなど、叛乱の芽を摘んでいった。その結果が「刺史未有及習者」という評価になる。ちなみに「名士を推薦した」とされる点については、常林伝(卷二三)にも「并州刺史高幹表為騎都尉、林辞不受。後刺史梁習薦州界名士林及楊俊・王淩・王象・荀緯、太祖皆以為県長」とある。梁習は人材発掘にも長けていた。
- (29) 注(28)の梁習伝の記事に続いて「建安十八年、州并属冀州、更拜議郎・西部都督從事、統属冀州、總故部曲。……文帝踐阼、復置并州、復為刺史、進封申門亭侯、邑百戸。政治常為天下最」とある。
- (30) 『三国志』卷一武帝紀に「〔建安〕十六年春正月、天子命公世子丕為五官中郎将、置官属、為丞相副」とあり、同所の注に引く『魏書』に「庚辰、天子報。滅戸五千、分所讓三県万五千封三子。植為平原侯、據為范陽侯、豹為饒陽侯、食邑各五千戸」とある。
- (31) 五官中郎将については、『統漢書』百官志二に「五官中郎将一人、比二千石。本注曰、主五官郎。五官中郎、比六百石。本注曰、無員。五官侍郎、比四百石。本注曰、無員。五官郎中、比三百石。本注曰、無員。凡郎官皆主更直執戟、宿衛諸殿門、出充車騎。唯議郎不在直中」とあるように、五官中郎将のもとには中郎・侍郎・郎中の官が属していたが、曹丕のもとに置かれることになったのは、属吏なのであろう。その属吏とは、ここに出てくる事例でいえば、文学・門下賊曹・功曹などが相当する。
- (32) 『漢書』卷一九百官公卿表に「〔列侯〕改所食国令長名相、又有家丞・門大夫・庶子」とあり、また『統漢書』百官志五に「列侯、所食県為侯国。……毎国置相一人、其秩各如本県。本注曰、主治民、如令・長、不臣也。但納租于侯、以戸数为限。其家臣、置家丞・庶子各一人。本注曰、主侍侯、使理家事。列侯旧有行人・洗馬・門大夫、凡五官。中興以来、食邑千戸已上置家丞・庶子各一人、不滿千戸不置家丞、又悉省行人・洗馬・門大夫」とある。なお、ここに見える家丞以外の官名(門大夫・庶子・洗馬・行人)がいずれも属吏であることは、前漢末の簡牘資料の尹湾漢簡の記載から明らかになる。詳細は拙稿「漢代における郡県の構造について——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」(『文学部論集』(佛教大学文学部)八一、一九九七年)を参照。また紙屋正和「前漢列侯国の官制——尹湾漢墓簡牘を手がかりに——」(『福岡大学人文論叢』三一―四、二〇〇〇年)も参照。
- (33) 『三国志集解』で盧弼は、この「平原府丞」を「郡丞」と考えている。そうすると、この官秩は六百石となり、孝廉に察擧されて就く初任官の官秩としては高いように思える。盧弼が考証するように「府」は、確かに「郡」を意味することもあるが、平原県も存在するので県の丞だと考えれば、四百石から二百石の間であるので、孝廉の初任官としては妥当だといえる。また年代的には若干無理があるが、曹植の就いた平原侯の丞の可能性もあり得る。曹操の子供たちを取り巻く状況を考える時、慎重に取扱いたい事例であるので、ここでは判断を避ける。
- (34) 劉楨については、伊藤正文「劉楨伝論」(同『建安詩人とその伝統』創文社、二〇〇二年、一九六八年初出)も参照。
- (35) この点については、渡邊義浩「『文学』の宣揚」(前掲注(1)渡邊前掲書所収、一九九五年初出)がある。しかし筆者は、渡邊氏とは違う観点で「文学」を考えている。それについては、拙稿「漢代の郡国文学——尹湾漢墓簡牘の事例を手がかりとして——」(『鷹陵史学』二八、二〇〇

二年）を参照。

- (36) 『統漢書』百官志五に「関内侯、承秦賜爵十九等、為関内侯、無土、寄食在所県、民租多少、各有戸数为限」とある。
- (37) また前に取り上げた楊阜は、卷二五本伝に「辟丞相府、州表留参軍事。……隴右平定、太祖封討〔馬〕超之功、侯者十一人、賜阜爵関内侯。……太祖征漢中、以阜為益州刺史。」とあるように、丞相府に辟召された彼は、州の願いによって参軍事となり、馬超討伐の功績によって関内侯を賜ったという。彼はそれを辞退しようとしたという話が収録されているが、その後彼は刺史として転出するので、高い爵位を持つ属吏ということではない。
- (38) 『三国志』卷一武帝紀・建安一八年五月丙申上の魏公に封ずる策命文に「……其以丞相領冀州牧如故。又加君九錫、其敬聽朕命。……魏国置丞相已下羣卿百寮、皆如漢初諸侯王之制。……」とあり、また同卷二文帝紀注に引く袁宏『漢紀』の「漢帝詔」に「……今使使持節御史大夫華歆奉策詔授丕丞相印綬・魏王璽紱、領冀州牧」とあるように、曹操は亡くなるまで魏王（建安二一年（二一六）に就く）と並んで、丞相・冀州牧を維持し続ける。
- (39) 『三国志』卷一武帝紀「〔建安〕二十三年春正月、漢太医令吉本与少府耿紀・司直韋晃等反、攻許、燒丞相長史王必營、必与潁川典農中郎將嚴匡討斬之」とある。
- (40) 宮崎市定『九品官人法の研究——科挙前史』（東洋史研究会、一九五六年）以来の九品官人法の研究史について当面、川合安「九品官人法の制定と貴族制の形成」（『三国志研究』四、二〇〇九年）を参照。

（にしかわ としふみ 歴史学科）

2015年11月16日受理